

悠久の京を訪ねて Part II Vol.4



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土物により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

豊作を願う鹿角器 — 福知山市石本遺跡

京都府福知山市



【古代の音色】

発掘調査では古代の人々がどのようなムラ・建物に住み、どのような道具を使って生活していたのか、また他の遺跡と比較してどのように違っているのか、道具の発達や墓の変化をみていきますが、意外とどのような音色を聴いていたのかはわかっていません。

風や川の流れ、雨の音、雷などの自然の音を聴いていたと思われがちな縄文時代ですが、獣や木の実の豊猟豊作、ムラ人の健康を願った色々な音色があったようです。

発掘調査の出土遺物から想像すると、木を打ち鳴らしたものの、土器にケモノの皮を張った太鼓が縄文時代にはあったようです。弥生時代には青銅製の銅鐸、粘土で成形した土笛、琴と思われる木製品が京都府内でもみつかっています。古墳時代には埴輪に造形された琴・鈴があります。

【踊りの拍子をとる楽器】

ここに紹介する鹿の角を利用した製品は、太さ3cm前後、長さ25cmほど残っています。全体としては棒状で長さ15cmの範囲に鋸のように44条の刻み目を入れています。これは、民俗例にある「棒ササラ」によく似ています。出土したのは

福知山市石本遺跡で、幅3m、深さ0.9m、長さ40mの大きな溝から、6世紀後半(古墳時代後期)の土器とともに出土しました。

この製品の用途については古いに使用したとする「卜骨説」、数字・記号をあらわしたと見る「記号説」などいろいろな説がありますが、一説として田植えの豊作を祈って田遊びに使用する楽器とも言われています。多数の細い切り込みを入れた木や竹を片手に持ち、もう片方にはこの刻み目を入れた鹿角器を持ってすり合わせて踊りの拍子に使われたものとも言われています。もしそうならば古代において稲作にまつわる祭りの様子を伝える資料になるでしょう。今後の研究に期待されます。



石本遺跡の鹿角製品(棒ササラか?)